その他

回想的萩原先生

鈴　木　　稔※

※　帝京大学文化財研究所

はじめに
Ⅰ．海外との交流
Ⅱ．帝京大学にて

はじめに

帝京大学文化財研究所所長・教授、帝京大学やまなし伝統工芸館館長、公益財団法人山梨文化財研究所所長を兼ねられた萩原三雄氏が逝去されて一年半余り。その間、氏に対する追悼惜別の辞が多くの人々から寄せられました[1)]。それらを拝見すると中世考古学の学際的研究と連続シンポジウムの開催、金山の発掘調査と総合的研究、城郭の踏査・研究、山梨県から佐渡・伊豆・高知にまで広がった史跡整備や世界遺産登録の活動、自治体史誌編纂、数えきれないほどの編著作と講演活動、マスメディア登場[2)]、山梨県立考古博物館長はじめ山梨県立博物館と甲斐黄金村・湯之奥金山博物館の開設への貢献などなど萩原三雄氏のさまざまな学術的業績とたぐい稀な行動力・調整力・組織力、そして、特筆すべき後進育成・盛立てパワーについて再認識させられます。もちろんそれらの仕事は発掘調査、分析、保存処理といった「文化財研究所」の運営という重要で気苦労の多い日常業務をこなしながらのことでした。

このうえ何を今さらという気もしますが、35年間萩原さんのもとで働いてきた者として私が見聞きしたことをいくつか付け加えて忍び草とします。なお、故人を悼む文章に似合わないとは思いつついくつか註をつけました。実証を重んじた萩原さんに叱られないためだとご理解ください。

萩原三雄氏（1947-2022）の経歴と業績については皆さんの追悼文中に詳しく記されていますが、「文化財研究所」に関してだけ確認しておきます。1986年に財団法人山梨文化財研究所が設立されました。財団理事長は帝京大学総長・理事長冲永荘一氏、所長は谷口一夫氏、第一研究部長が萩原三雄氏（まもなく「第一」は外されました）。翌1987年４月までに研究室長６名、財団職員合計12名の体制が整い、まもなく東八代郡石和町（現笛吹市石和町）に所屋も完成し、一年のうちに「山梨文化財研究所報」も第４号まで発行されました。ここで小さな変化が生じました。1988年８月発行の所報第５号から題字が「帝京大学 山梨文化財研究所報」となり、1989年５月に「帝京大学 山梨文化財研究所 研究報告」第１集が発行されました。二つの「文化財研究所」ができたのではなく、法人名と施設名の区別であるというのが公式見解でした。具体的には全国埋蔵文化財法人連絡協議会中部・北陸ブロックに属して公的機関に準じた立場で発掘調査をするのが財団法人の文化財研究所、より学術的な立場で自由に活動しようというのが帝京大学を冠した文化財研究所という使い分けのつもりでしたが、ちょっとわかりにくかったかもしれません。二つの「文化財研究所」状態は2012年4月に前者が「公益財団法人 山梨文化財研究所」、後者が大学の附置組織「帝京大学文化財研究所」、とはっきり別々の組織となることで整理されて（別個の財団法人の下にあった登録博物館やまなし伝統工芸館も2013年に博物館相当施設帝京大学やまなし伝統工芸館と改められました）今日に至るわけです。ということで萩原三雄氏の思い出話は2012年以前については財団法人（および帝京大学山梨文化財研究所）の、以後はほぼ帝京大学の文化財研究所でのこととお考えください。

さて、「回想的萩原先生（ディーユエンシエンション）」。中国語風の妙な題をつけましたが、「思い出の萩原さん」という気持ちです。あとで触れますが、中国の大学と共同研究を行なっていた三十数年前のこと、萩という漢字が現代中国人にはなじみが薄いらしくしばしば荻に書き間違われ、発音もチウユエンがディーユエンになったりして脇にいてちょっと困ったものでした（もっともご本人は一向意に介されませんでしたが）。こんな話

（1992.7.27 山梨日日新聞広告より）

を織り交ぜてふくめて私の見てきた萩原（はぎはら）さんの思い出を書いてみたいと思います。

Ⅰ．海外との交流

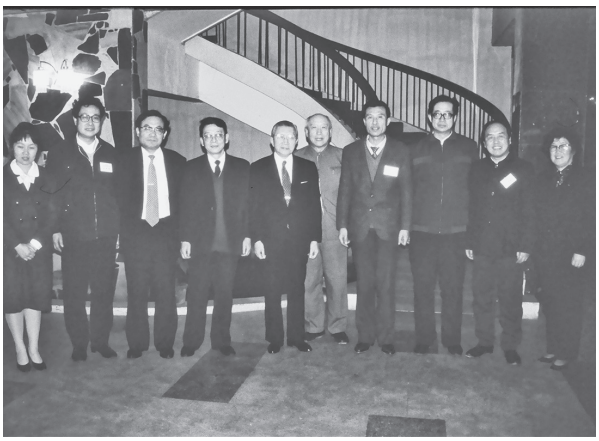
萩原さんは頻繁に日本各地の遺跡、寺社、城郭、鉱山などを巡る旅を企画し自ら講師となって文化財ファンを引き連れて案内していました。延べ参加者数がどれほど多いかおそらく誰にも把握できていないことでしょう。中でも「山日YBSカルチャーセンター山梨文化学園」での活動は山梨県民の文化財に対する関心を高めた点で萩原さんの大切な業績のひとつと言えるでしょう。

ですが、海外での文化財講師、ということになるとここに示した広告にあるのがたぶん唯一のものではないでしょうか。1992年秋の中国石窟めぐりは上海－西安（前年６月にオープンしたばかりの陝西歴史博物館）―天水（麦積山石窟）―洛陽（龍門石窟）―河南省鞏県（鞏県石窟）―北京―大同（雲崗石窟）と巡って北京から空路帰国という豪華旅行でした（三大石窟と言いつつ４か所あるのはオマケということでしょうか）。私はたまたま同じ時期に後述の共同研究のため中国出張中だったので途中から合流して上海から洛陽までのあいだこのツアーに加わらせて貰いました。

当時の中国国内旅行はまだ鉄道が中心で、このツアーでも上海―西安で飛行機を使ったほかはすべて長距離鉄道での移動でした。軟臥車といって４人用の寝台がセットされたコンパートメントでの「大陸感」溢れる長旅で、夜行３回、深夜着１回、７時間乗車１回という強行軍です。文化学園のお客様は中高年主体のご常連多数だったと記憶していますから、同行講師としては「おもてなし」に努めることになります。まさに萩原さんの面目躍如といったところでしょうが、それにしても９日間24時間連続で「おもてなし」とは気力体力ともにタフそのものでした。ただ、惜しいことに肝心な各石窟での萩原節については憶えていません。石窟に着くと私はほぼ臨時添乗員状態になって、この窟を見せて貰うのに追加料金はなんぼかなどと裏方で駆けずり回っていた記憶しかありません。察するにこの時の萩原さんは学生時代の早稲田大学古美術研究会（名高いワセダのこびけん）仕込みの仏像に関する蘊蓄を傾けて名解説をされたことでしょう。

この時を含めて萩原さんは少なくとも３回中国を旅行していると思いますが、最初の旅は1991年4月のことでした。その前年から文化財研究所は中国文物共同科学調査事業を模索していました。連携先は当初の陝西歴史博物館（当時建設中）から安徽省合肥市にある中国科学技術大学に変わり、91年３月に帝京大学と中国科学技術大学との間での連携枠組みができあがり、文化財研究所（所長谷口一夫氏）と中国科学技術大学結構成分分析中心（主任張裕恒氏）とが５か年計画で文化財科学共同研究を進めることになりました。その翌月に萩原さんの初訪中となります。この時のメンバーは渡辺直経博士、萩原さん、私の３名で、コースは上海―鄭州―合肥―上海というものでした。渡辺博士（1919-1999）は人類学者で東京大学名誉教授ですが、帝京大学教授だった（1979-1984）というご縁があったのと、何よりも日本の文化財科学発展の歴史における大きな画期とさ

れる文部省科学研究費特定研究「自然科学の手法による遺跡･古文化財等の研究（1976年度から３か年）の主要メンバーだったということから文化財研究所の研究顧問になって戴いていました。お名前は「渡辺直経（なおつね）」ですが、文化財科学分野のおおかたの人は敬愛を込めて「直経（ちょっけい）先生」とお呼びしたものでした。



（帝京大学山梨文化財研究所報第15号、1992.7表紙より、左から３人目が萩原さん、一人おいて右が渡辺直経研究顧問、その右は中国科学技術考古学会理事長の柯俊氏、鄭州市にて鈴木撮影）

さて、この時の訪中の使命は両機関の間で共同研究の詳細を詰めることでしたが―そのために萩原研究部長の出番となったのです―もうひとつ大きな目的がありました。それは中国科学技術考古学会の設立大会に参加[3]して祝意を表するとともに直経先生による日本の文化財科学を紹介する講演[4]を含めて中国各地から集まった大学や博物館の考古学、人類学、年代学、保存科学、科学史などのおおぜいの専門家と学術的な交流をすることでした。この機会に文化財研究所の存在をアピールしたいと考えたわけです。萩原さんにとっては慣れない分野の人々に囲まれ少々勝手が違ったかもしれませんが、初めて出会い、杯を交わしてできたこの時の人的つながりがその後５年間にわたった日中共同研究推進に大きな力となりました。

海外でのご活躍をもう一つ記しておきましょう。1998年３月に文化財研究所初代所長谷口一夫氏が退職され、萩原さんが（所長代行の期間を経て）二代目所長職に就かれました。そして2004年５月のこと、韓国全羅北道益山市にある圓光大学校の馬韓・百済文化研究所から萩原所長あてに招聘状が送られてきました。だいぶ前から文化財研究所の畑大介氏がお知り合いの考古学者との間で交流を深めて来られたおかげだったと思います。こうして、５月末から萩原さん、畑さん、私の三人で韓国東南部３泊４日の旅に出ました。この時の萩原さんはすごかった。山梨を朝早く発って、仁川経由で夕方圓光大学校に着き、午後５時から特別講演、その後歓迎会（これは毎晩続きましたが）というハードスケジュールを難なくこなしていました。初日の晩、無事一仕事終えた萩原さんは韓国側の研究者とすっかり打ち解けて、国内ではともかく海外であの時ほどくつろぎはしゃいだ姿を知りません。なお、この時の講演内容のメモが残っていますが、日本の中世歴史考古学について金山、城郭（特に倭城についても触れています）、銭貨、墓制・葬制、石塔を取り上げて概観・紹介するものでしたが、その狙いは日韓共同で研究したい項目を列挙･提案することだったのでしょう。韓国の中堅・若手研究者が真剣に聴いていたのが印象に残っています。

残念ながら圓光大学校との共同研究は本格軌道に乗る前に先方の事情で中止になってしまいましたが、この時の駆け足旅行がのちに萩原さんのある発想にヒントを与えたのかもしれません。訪問した圓光大学校と全南大学校には大学の顔とも言える立派な博物館があり、他にも近隣の昌原大学校、釜山大学校なども大学付属博物館を設置していることを見聞きしたことは、考古学や文化財の研究者としては耳寄りな話だったことでしょう。この経験が数年後に帝京大学の博物館構想に結び付いたのではないか、こんな風に私は考えています。

（「日本歴史考古学の現状と課題」と題して講演する萩原さん。背景に「場所:国立全州博物館」とありますが、圓光大学校構内だったのかもしれません。鈴木撮影）

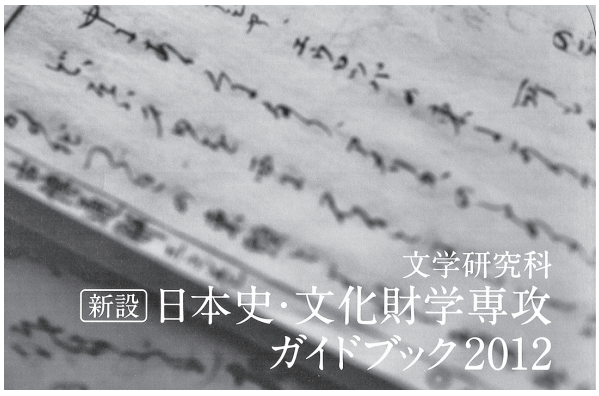
Ⅱ．帝京大学にて

2010年より少し前のことだったと思います。帝京大学八王子キャンパスの再整備事業が本格化しつつありました。八王子キャンパス構内には旧石器時代から平安時代、近世・近現代の遺跡があり、駐車場や建物の建設にはそのつど事前の発掘調査が必要になります。帝京大学との関連があって、そういった仕事は以前から財団法人山梨文化財研究所が行なっていたのですが、ここへきて一気に大面積の発掘調査をすることになり、大学との縁が深まりやがて萩原さんの大活躍につながるのです。2010年から2015年頃にかけて帝京大学総合博物館建設、文化財研究所職員の帝京大学での非常勤講師兼務、大学院日本史･文化財学専攻開設、帝京大学文化財研究所設置、帝京大学やまなし伝統工芸館改組、文学部史学科美術史・文化遺産コース設置、さらに帝京大学文化財研究所教職員の増員・施設拡充、と萩原さんは抜群の行動力・実行力を発揮して目まぐるしい成果をあげて行きます。それらは互いに関連しあっているのですが､ここではなるべく切り分けて書いてみます。

2010年の夏前ころ、私は萩原さんから大学博物館開設に向けて基本プランを考えるよう命じられました。どうやらキャンパス内に大規模な建物を作るにあたって地域貢献（キャンパス敷地は八王子市と多摩市双方にまたがっています）が欠かせないという社会的要請を受けて、それを地域に開かれた大学博物館開設という形で実現しようというお考えだったようです。萩原さんは博物館の入る建物（現在の「ソラティオスクエア」）の設計段階から会議に参加し、帝京大学博物館開設準備室が発足するとその室長に任命されました（2012年４月発令だったと記憶しています、室員は私だけ）。ここで山梨県内での博物館開設の経験、韓国での大学博物館の見聞などが生きてきたのではないかと推測します。多忙を極める日常業務と研究活動のなか、萩原さんのご苦労が思いやられますが、大学史展示スペース、多摩の自然と歴史（キャンパス内遺跡で発見された出土品が目玉となります）を常設で展示するコーナー、大学所有の知的資源や美術品などを展示する広い企画展示空間という当初からの３本柱は基本的にぶれなかったと思います。こうして、帝京大学総合博物館は初代館長に元史学科長の南啓治名誉教授を迎え、2015年９月無事開館しました。

大学博物館構想より少し前から萩原さんは文化財研究所の新しい方向性について考えを巡らすことが多くなっていったように思います。たぶん頭の中でさまざまなプランが浮かんでは消えていったことでしょう。それが2010年後半頃になると大学院新専攻開設、大学博物館建設、文化財研究所の大学附属機関化という三事業を組み合わせて同時に進めようという「大計画」にまとまって行ったように思います。まず2011年４月、文化財研究所職員数名が非常勤講師として帝京大学八王子キャンパスで考古学や文化財の授業を持つことになり、これは翌年からの大学院授業への布石ともなりました。史学科の授業とは別の総合基礎科目授業を担当した人は殺到する学生に帝京大学の規模の大きさを実感したそうです。

翌2012年４月、帝京大学大学院文学研究科に日本史･文化財専攻（博士前期･後期課程）が新設され、共通分野、日本史学分野、考古学文化財科学分野、地理学・民俗学・地域比較史分野という４分野を学ぶ博士前期課程7名が入学してきました。そこに至るまで主に史学科長の南啓治氏、次の学科長になられた小林昌二氏、後に２代目博物館長になられた今村啓爾氏、それに萩原さん、私が大学当局との間で会議と書類作りを繰り返したのですが、中でも萩原さんは文化財研究所という独自組織を率いる長という立場にあってキーパーソンの役割を果たされました。この頃には先ほどの大学院、博物館、実習施設を兼ねた大学附属文化財研究所という三者連携構想ができ上がっていたのだと思います。



（帝京大学大学院文学研究科専攻新設のガイドブック表紙から）

同じ2012年４月、帝京大学文化財研究所が石和に設置され、専任所員２名（萩原さんと私）、独自予算なしでスタートしました。私たちは帝京大学の教育職員（萩原さんは所長・教授）となり、同時期に公益財団法人に移行した山梨文化財研究所研究員（萩原さんは所長）を兼務することになりました。見た目にはひっそりした出発でしたが、萩原さんには大きな感慨があったのではないかと考えます。研究所創設以来25年、二代にわたる所長を悩ませ続けてきたのは財団法人としての経営安定と研究機関としての研究費確保だったと思います。経営努力で多額の利益を上げて研究費に回すといった仕組みの作れない財団法人では外部資金導入に活路を求めることになります。設立当初、文化財研究所のお手本は奈良の元興寺文化財研究所でした。その理由の一つが科学研究費を申請できる研究機関として認定されている点でした。その認定を求めて数年にわたって毎年文部省（当時）に書類を提出し続けましたが、実績不足だったからでしょうかうまく行きませんでした。やむを得ず「郵政省お年玉つき郵便はがき寄付金による補助金」や自治体の予算による学術調査など、いろいろなやりくりで研究を続けてきたのです。それが、大学の機関となることで長年の懸案が解決できる見通しが生まれたのです。

ここまででもずいぶんな仕事量だったと思うのですが、萩原さんはさらに先を展望して、文学部に文化財分野の独立した新学科（あるいは山梨に新しいキャンパス）を立ち上げたいとの意向も持っていたようです。そんな構想の一部が2015年４月の帝京大学文学部史学科に美術史・文化遺産コース開設という形で現実のものとなりました。従来、史学科には日本史、西洋史、地理学、東洋史、考古学の５コースがあったのですが、新たに美術史、文化遺産、文化財科学を中心に学ぶコースが生まれたのです。こうして、コース選択の学部３年から大学院前期、大学院後期と一貫して文化遺産・文化財学を学べるようになりました。また、二つの文化財研究所職員はそれまでも大学院生ばかりでなく学部生対象の授業も受け持っていましたが、コース新設に伴って担当科目がさらに増えました。それに応じて帝京大学文化財研究所の教育職員も徐々に増えていくのですが、残念なことに、あの元気いっぱいだった萩原さんの体調にこの頃から翳りが見え始めたのでした。

書くほどにあれこれ思い出されてきますが、この辺で切り上げることにしましょう。文化財研究所の持続的発展の基礎作りが一段落した後、萩原さんにもっと多くの時間が残されていたなら、と想像することもあります。お役目をすっぱり辞めてゆったりとした時間の中でいよいよ自分の研究を深めていったろうか、それとも、あれこれ考えては周りに指示を飛ばし続けて相変わらず忙しくしていたろうか、後のほうがいかにも萩原さんらしい気がします。お亡くなりになる直前までまさにその通りでしたから。見事な一期と言えるのではないでしょうか。

合掌。

（帝京大学文化財研究所・帝京大学大学院元教授）

註

１）以下の文章を挙げておきます（掲載日順）。
数野雅彦「萩原三雄さんを悼む」、『山梨日日新聞』2022.2.25
今村啓爾「萩原先生の金山研究と本書の刊行」、萩原三雄著『金山衆と中世の鉱山技術―甦る山の世界―』高志書院、2022.10、p.319-321
河西学「追悼文 萩原三雄所長を悼んで」、山梨文化財研究所報第61号、2023.3、p.7-8
新津健ほか19名「萩原三雄氏 追悼文」、山梨県考古学協会誌第30号、2023.7、p.1-24
杉本仁「萩原三雄―その人と学問」、山梨郷土研究会「甲斐」第161号、2023.10、p.48-60

２）特に、1998年４月から１年にわたってYBS山梨放送のラジオ番組「萩原三雄の閑話休題」（『情報キャッチアップ・GOO!MORNING』内のコーナー）で考古学者萩原三雄としてモーニングキャスターを務め、毎週火曜日に考古学や文化財の話題を県民に広く発信し続けられたことは萩原さんならではのお仕事だったと思います。おかげでこの番組に多くの関係者（私も）が出演させてもらいました。

３）拙文「保存科学ノート（10）中国科学技術考古学会設立に寄す」、帝京大学山梨文化財研究所報第13号、1991.6、p.23

４）この時の講演内容は、渡辺直経「日本における文化財科学の近況」、帝京大学山梨文化財研究所報第15号、1992.7、p.2-6に収録。鄭州から合肥に移動後、中国科学技術大学で行われたもう一つの講演は、渡辺直経1992「考古地磁気と古地磁気による年代学」、帝京大学文化財研究所研究報告第４集、1992.7、p.1-20に収録。